

北前船の寄港地 小浜と敦賀

概要

北前船（「北行きの船」）は、江戸時代中期（1603年～1867年）から昭和初期（1926年～1945年）にかけて、大阪と北海道の間の沿岸の航路を航行した交易船です。瀬戸内海から日本海を往復し、北からはニシンや昆布、西からは衣類や酒、塩などといったような、地場産品を売買するために各地の港に寄港しました。海運は港町の発展を促し、海運業を営む商人に繁栄をもたらし、国内の文化交流に大きく貢献しました。

もっと詳しく知る

北前船という船

若狭地方では、いま一般的に北前船と呼ばれている船は、千石船、大廻り、弁才船と呼ばれていました。北前船は往路・復路ともに物資を運び、各寄港地で交易を行っていたため、大坂から江戸（現在の東京）まで太平洋沿岸に沿って貨物を輸送した船（復路では荷が無かった）と比べると、より高い利益を確保していました。

海運貿易による繁栄

小浜も敦賀も、日本海側の航路の中間地点に位置し、当時の首都であった京都にも比較的に近い場所にあったので、北前船にとって重要な寄港地でした。これにより、船は小浜や敦賀で荷降ろしができ、そのため商品を陸路で京都へ運ぶことができました。北前船は二つの町の発展に不可欠なもので、遠く離れた地域から食べ物や商品、ニュースを運び、交易経済を刺激し、日本各地のさまざまな文化を寄港地に伝えました。特に敦賀は入港する船の多さによって栄え、17世紀後半に活動のピークを記録しました。

代替ルートと輸送手段の開発

やがて、本州と九州の間の関門海峡を通り、瀬戸内海を経由して大阪に直接アクセスできる、いわゆる西回りルートが開拓されると、すぐに、より便利であると判明しました。その結果、敦賀、小浜、琵琶湖、大津（現在の滋賀県）、京都を通る陸路の交易路の一部は人気が下がりました。その後の鉄道やその他の交通手段の発達に伴い、北前船の利用は概して徐々に減少していきました。

展示品

最も目を引く展示は、北前船の精巧な模型の複製で、原品は小浜の八幡神社に保存されています。特別に製作された船の模型は、海の安全を授けると信じられていた守護神である船玉の霊の神聖な器と見なされていました。他の地域では、神を表す品物は伝統的に実際の船の帆柱に取り付けられていたため、船玉崇拝のこの変化は小浜に特有のものです。

展示されている他の品物には、干支の文字を使用して基本的な方向を示す 19 世紀半ばの方位磁石や、船の通過の証明として機能した木製の札、小浜藩の北前船の乗組員の日記の複製が含まれます。頭が虎で体が魚という想像上の生き物であるシャチホコの大きな若狭瓦の像と、3 羽の雛と雌鶏の若狭瑠璃の彫刻は、北前船が交易していた時代にこの地域から出荷された商品の例です。